

第3節 社会の教育力の変遷

本節では、非行と見なされる行為とは何かという概念の問題を越え、逸脱視される若者の行為への具体的な対処方法に関するインタビュー結果を検討していく。被調査者自身が若者であったときに、本人及び同世代の犯した非行と見なされる行為を諫め、叱責を加えること、そして、現在大人である被調査者が現代の若者の逸脱行為に対して叱責を加えることを、ここでは「社会の教育力」とみなす。具体的には、親や祖父母による「家庭」の持つ教育力と、地域に存在する親以外の大人といった「社会」の持つ教育力について被調査者にインタビューしている。

現在、被調査者は、かつて大人に注意を受けてきた立場から、大人となって子どもを注意する立場にある。つまり、以前の社会の教育力に触れた経験と、現在大人として自分の子どもや地域の若者を注意した経験を持つ。よって、被調査者の語る過去と現在の家庭・社会の教育力の差異から、社会の教育力の変遷を捉えることができるだろう。以下、第1項では、教育力の発生状況として家庭をとりあげ、過去と現在の教育力の変遷を検討していく。第2項では、教育力の発生状況として、家庭外の地域・コミュニティの大人をとりあげ、過去と現在の教育力の変遷について検討していく。

第1項 家庭の教育力の変遷

被調査者は、かつては家庭において親や祖父母から教育を受け、現在は大人として自分の子どもを注意する側にたっている。被調査者が大人に注意を受けてきた時期とは、親の平均年齢から推察して10～20年程前と考えられる。この時期に比して、現在は、少子化に伴う核家族化、都市化による地域コミュニティの崩壊の影響を受け、家庭の教育力も変遷を辿ってきていることが想定される。よって、まず本項では、この家庭の教育力の変遷について検討していく。最も身近な話題でもあるため、家庭内の教育力を語る場面について、かつての親の教育と比較しつつ語られる場面が頻繁に見られた。

インタビューの結果は、「家庭の教育力の希薄化」としてまとめることができる。具体的には、被調査者が若者であったとき、逸脱視される行為をなした若者は、必ず大人に注意されたと語る。しかし、現在若者を注意する立場となった被調査者は、自身の親と比較して、同じように

教育力を行使できないと述べている。

ここでは、被調査者が若者であったときに、非行と見なされる行為に対して、家庭内の大人である親や祖父母の対応の過去と現在での差異について包括的に述べられている場面についてまとめる。さらに、家庭内の教育力について差異を与える要素についても述べられている。

Scene3-1～3-2 に見られるように、被調査者が若者であった頃の情報量や、核家族化のような、社会・生活状況の変化を理由とした、親の認識の変化について言及されている。

[Scene.3-1] グループ 6 (R は調査者、S は被調査者の発話を示す：以下同)

S1：でも、私たちが子供のときに、親が世間を見てた量と、私たちが親になって、世間を見る量では、なんかちょっと違うかなあって。理解もできるし、許せる範囲も広がってるから。

S2：昔は情報も少なかったでしょ。だから隣近所とかせめて町内界限の目を気にするとか、その中のルールにはまっていって感じだったのが、だんだん今はテレビとかいろいろなもので、世界の常識とか、日本国内、東京都とか繁華街もあるけど、そういうところのも頭に入っちゃうじゃない。子供は一緒だけど、親もその情報を見てるから、あれよりはましかなとか。っていうところもあったりして。

S1：甘くなったのかな。ここまでは許せるっていうのが。

[Scene.3-2] グループ 4

S1：昔はそれ（相手を気遣う等の思いやりの心）が自然に身についたものだったけど、今は忙しい時代になって、親が意識して育てないと身につかなくなった。うちなんかは、年寄りと一緒にいるから、私が意識して話をするようにしてた。じゃないと、子どもたちはどう接していいかわからなくなってたと思うし。

S2：若い頃は旦那の両親との同居は本当に大変だったけど、子どもの教育にはよかったって今は思えるかな。それに、親が子どもを怒っても、年寄りが子どもの逃げ場所になることも多かったし。今の子どもって、そういう逃げ場所がないから非行とかにも走っちゃうんじゃないかな。

S1：ああ

[Scene.3-3] グループ 8

S2：お父さん、お母さんたちも、自分の子どもにすごそう（遠慮する）じゃないかな？

S1：遠慮するね。ある程度でも自分の子どもっていう。

S3：そういう世代。

S2：自分の子どもにもそう思うときがあるから、全体的にものすごく子どもに対して、かわい
いかわいい。

S1：もう弱くなっちゃったかな？

S2：何か、ほら、やっぱり子どもが少ないから、何かもう。

S1：そう。

S2：かわいがるっていうか、大事に育てよう、大切に育てようっていうのはいいんだけどね。
それを何か越えちゃって、やっぱり越えるとやりすぎちゃったり、そういうつながり

S1：何でも親がやっちゃう。

S2：ああそうだ。

S1：あの確かにやってやりたいよね。

S2：それは本当にそう思う。

Scene.3-1 では、現在、テレビや雑誌等のマスメディアから若者の情報が数多く伝えられるため、大人が若者の文化について知識が増加したことに話題が及んでいる。それに伴い、子どもの行動に対して寛容になることができ、「許せる範囲も広がってる」と述べられた。情報が豊富に得られることで、子どもの行動を規制するルールについて、「甘くなったのかな」と語る場面が見られた。

Scene.3-2 では、核家族化の進行という生活状況の変化が、かつての家庭内の教育力を減退させる結果となっていることが語られている。数世帯で同じ屋根の下で暮らすという生活を営んでいた時代と比較して、子どもは家庭内でコミュニケーションをとる相手が親以外に得られなくなりつつある。そして、祖父母というコミュニケーション相手を失ったことで、「子どもの逃げ場所」が失われたと考えられている。

Scene.3-3 からは、近年の日本に特徴的な少子化の影響が、親の態度の軟弱化につながっていることが述べられている。つまり、「子どもが少ないから」、「大事に育てよう、大切に育てよう」として、教育力が「弱く」なってしまっているのである。さらに、親が子どもに対して何でもやりすぎてしまうことが子どもの教育の弊害となりうると認識しながら、実際には子どもの世

話をやいてしまう状態にあることも伺える。

1. 以前の家庭における教育

被調査者が若者であったときに親から受けた教育についての印象と比較して、現在親となった自分が同じ教育ができるかどうか尋ねた。Scene.3-4、Scene.3-5、Scene.3-6 で共通して言及されている事柄は、非行と見なされる行動を子どもがなした場合、親の行動による明確なレスポンスがなされていたことである。以前は、悪いことをしたら、殴られるなり、怒鳴られるなりの行動を伴った反応が必ず返ってきたようである。

[Scene.3-4] グループ 5

R：自身のお子さんだったら、厳しく言うത്？

S：うん。今はそう思ってるけどねえ。でもまだ小さいさいなあ。中学生、高校生になって、体力が対等になったらねえ、どうかなって気がするけど。今はまだ小学生で、こっちが力強いからねえ。でも、昔の親は今より厳しかったよ。自分が親くらいの年になって、同じ厳しさができるかなっていうと、どうかなって…。俺よく殴られたから。でも、なかなか俺子どものこと、まあ、殴らないことはないけど、ものすごい殴り方だったから、俺の親は、本気で殴られたし、だから、そういうのはできないから俺、今子どもに。昔はどこも厳しかったよね。それがだんだん緩んできて、何やってもいい状態？何でもアリアリの状態だからさ。そうなってくると、注意してても、注意が行き届かない。みんなで渡れば怖くないって状態になってきちゃってるからね。

R：ああ。

[Scene.3-5] グループ 12

S1：昔は、「小さい子は 9 時になったら寝なんよ」っていわれとったがいや。あれ、嫌やったけど、社会全体がそういう意識やったし。それが、自由やって言われれば確かにそうやけど。(早く寝たほうが)子どもにとっても体にいいんやから。ま、自由やっていわれれば、そうやけど。次は自由って、なんやって思わなあかん。

S2：（もっと大きくなれば別だけど）、ガツと、子どもに教える時期も必要なのに、それがなあなあになってきとる部分があるんかなって思います。

S3：うん。

[Scene.3-6] グループ1

R：最後に、大人が、一社会人として、何かしてあげられることがあれば、それは何だと思いますか？

S：…昔は、子どもたちのためなんて考えなかったもん。自分たちの生活のためにやってた。子どもたちも自分の生活のための一員だったから。だから、子どもたちも家の手伝いをしないと、生活が回らないんだよ。親なんかは畑に行ってるわけだからさ。お風呂なんかは俺が焚かないと入れなかったし…。つまり、家族の一員だったわけ。でも、今は、けっこう余裕があつて、子どもたちのためについていうと、聞こえがいい。

R：はい。

Scene3-4 では、被調査者が若者であったときの親の教育態度について、「よく殴られた」、「本気で殴られた」という実際の経験から、「昔の親は今より厳しかった」と述べている。しかし、「自分が親くらいの年になって、同じ厳しさができるかなっていうと、どうかな」という、現在の自分の子どもに対して自分の親と同じ行動をとることができないという発言がなされた。

Scene.3-5 でも、『小さい子は9時になったら寝なんよ』っていわれ」ており、しかも「社会全体がそういう意識やった」という発言がなされている。被調査者が若者であった頃は、親から子どもへの注意が効力を持っていたと考えるとされる。しかも、親の注意をきくということは、被調査者が若者であった当時、社会全体に流布していたルールであり、それゆえ説得力があったと推察できる。

Scene. 3-6 においては、被調査者が子どもであった頃の家族の意識について言及されている。そこには、「子どもたちも自分の生活のための一員だったから」、「子どもたちも家の手伝いをしないと、生活が回らない」という、子どもも一人の家庭を営むメンバーとして、一人前として見なされていたことが伺える。

全体として言えることは、親は子どもの行動を制御することができる程、強い力を持った存在であったことが伺える。そして、かつて若者であった被調査者が、自身の親の注意内容を聞

き入れて行動を変容させることが、家庭の教育力を維持していたのである。

しかし、自分が親となったとき、Scene.3-4に見られるように、「そういう（本気で殴る）のはできないから俺、今子どもに」という発言が見られるのはなぜなのであろうか。現在の家庭における教育の現状について、以下に見ていきたい。

2. 現在の家庭における教育

これまでのインタビュー結果によれば、被調査者が若者であったとき、逸脱視される行為をなしたと家庭内の大人に分かった場合、必ず注意を受けたり、叱られたりしたようである。しかし、現在の家庭では、逸脱視される行動をとっていた子どもに対して、注意したり、叱ったりという行動がとられていないことが伺える。見て見ぬふりをし、禁止せず、他人の前でやらないように諭す程度に留まっている。このような点について、以下、Scene.3-7～3-11 のインタビュー結果に基づき、詳しく見ていくことにする。

[Scene.3-7] グループ3

R：もう一度お聞きしたいんですけど、昔の不良と今の不良の違いについて。

S1：うーん、昔は、夜遅く出歩いてたら不良に見えたよね。

S2：そうね、でも、昔の感覚でいったら、うちの息子は本当に不良だよ。

S1：今じゃ、24時間営業のコンビニとかあるし…、昔だったらそんなとこにたむろしてたら、不良少年、少女に見えたよね。今じゃもう慣れちゃって、夜遅くまであいてるし、親が行って来て、なんて頼んだりするから、一概にそうとは見えないよね。

S2：うちなんかは、「10 時までには帰っておいで」って言ってるけど、他のお母さんに言わせれば、それは遅すぎるって…。でも、10 時でも帰ってこないんだもん。子どもは「うちくらいだよこんなに門限早いの」って言うし。本当に、うちの息子は不良なんです。でも、近所の人には愛想よくして、愛されてるし、不良じゃないのかもって思うし…。

S1：うんうん。

[Scene.3-8] グループ 2

R：皆さんのお子さんはどうですか？高校生だと、髪を染めたりとかピアスを開けたりとか、
やってる子が多いですけど。

S：うちの子はやってるからね。不良なのかしら？

R：注意しました？

S：しない。ただ、「こうすればこうなるよ」くらいしか言わない。後はやればやって……。でも、女の子は一時期こるのよね。

Scene.3-7、3-8では、「非行」を定義するための明確な規準が曖昧になっていることから、自分の子どもに対しても、不良なのかどうなのか、家庭の教育力の行使者として戸惑っている姿が浮かび上がってくる。Scene.3-7における、「本当に、うちの息子は不良なんです。でも、近所の人には愛想よくして、愛されてるし、不良じゃないのかもっても思う」という発言や、Scene.3-8での、「うちの子は（髪を染めたりピアスを開けたりという行為を）やってるからね。不良なのかしら？」という発言内容は、叱る、注意するという行動を親に行使させる前提が揺らいでいる姿を示す結果といえる。

さらに、Scene.3-8では、逸脱視される行為を特定できていないため、子どもに対してどのように反応していいのか分からない、非行かどうかを判定する段階での戸惑いがあるため、学校の校則に違反する行為をしても「(注意は) しない」し、『「こうすればこうなるよ」くらいしか言わ」ないという。子どもが逸脱的な行為をなしても、その行為に対して明確に注意することができなくなっているようである。

[Scene.3-9] グループ 3

S4：タバコとかって吸う？うちは絶対に吸わないんだけど……。昨日同級生の親たちと話してて、やっぱり、その、吸う人がいるのよね。で、そこのお父さんは吸わないんだって、でも、息子がベランダで見えないように吸ってて、見つからないように外に投げ捨てるんだって。それじゃかえって危ないから、お母さんは「ここで吸いなさい」って灰皿を用意してるんだって。それってちょっと首かしげちゃうんだけど……。だからね、学校とかでは吸っちゃダメだけど、止められないから、なんてねえ……。

S3：うちの子はたぶん吸ってる……。臭いんだもん、帰ってくると。どきどきポケットの中を

チェックするんだけど、ピアスと、タバコは必需品みたい……。

R1：それを見つけた時ってどうします？注意したりしますか？

S3：それは、私は見なかったことにして、お父さんにこっそり言って、それとなく言ってもら
うかなあ。一般論として、「ダメだよ」って言うておいって、お父さんには言ったけど、ど
ういうふうに言ったかは知らないです。私は直接は言ってないです。

S2：なんか、そうやって吸う子は、かっこいいと思って、見せびらかして吸うのね。高1の息
子の同級生なんか、電車降りてすぐ吸ったり。わざとみんなの前で制服着て吸うのよね。

S3：私もそういうイメージなのよ……。なんでかなあって……。

近所の人にはよく言われたのよ。「〇〇君（S3さんの息子）」とは名指しで言わないんだけど、
「〇〇君くと2〜3人の横を車で通ると、いつもチカチカしてるのよね」って。で、私か
ら言うよりもお父さんから言ってもらったほうがいいと思って、お父さんに頼んだけど……。

S2：うん。

[Scene.3-10] グループ3

R：もし、皆さんの時代にタバコを吸ってたのが分かったとしたら、やっぱり不良ってみなさ
れたんですか？

S3：私は、うちの兄が真面目だったんですよ。でも、兄が高校生の時に引出しを開けたら（タ
バコが）入ってたんで、なんかそれで納得しちゃたのね。真面目だと思っていた兄が人並
みなんで、「ああ、男の人ってこうなんだなあ」って。だから、タバコに関してはそういう
ふうに納得しちゃった部分があるのね……。

S1：興味のある時期だからしょうがないみたいなね。

S2：誰しもあるんじゃない？

S3：たぶんね、一回も吸わないってことはないと思う。友達にすすめられてとか。どんなもの
かなって。

S1：だけどね、法律だから困っちゃうんだよね。ずるい話だけど、親としては見つからないで
ほしい、っていう。

S3：今は見つかっただけでも停学だって聞かし。

R：じゃあ、ご自身のお子さんが、中学生なり高校生になって、茶髪とかタバコとかに興味を持ちはじめたら、どうなさいますか？

S1：それは言うさ。もちろん。

S2：それはしつけでしょ。タバコなんかは特にねえ。

R：自身のお子さんだったら、厳しく言うത്？

S2：うん。今はそう思ってるけどねえ。でもまだ小さいさいなあ。中学生、高校生になって、体力が対等になったらねえ、どうかなって気がするけど。

S1：そうね。

Scene.3-9、3-10、3-11 では、自身の子どもの喫煙に関する親の対応について述べられている。第1節でも示したように、喫煙行動を禁止したり抑制したりという行動は見られない。このことは、Scene.3-10にあるように、「法律だから困っちゃう」けれども、「ずるい話だけど、親としては見つからないでほしい」という発言や、Scene.3-9にあるように、匂いや、「ポケットの中をチェック」することから、「ピアスと、タバコは必需品」であることを知っているという発言に特徴的にみいだせる。そして、子どもの喫煙に対する対処方略としては、子どもが喫煙後、窓の外に吸い殻を投げる行為を禁止するために、『『ここで吸いなさい』って灰皿を用意』するだけで、子どもに対して厳格に接することはない。このことは、Scene.3-11からもみてとれる。この結果より、現在の大人（親）は、子どもが喫煙しているところに直面した場合、喫煙そのものを禁止したり、否定したりするよりも、見つからなければ喫煙を容認してしまうことが示される。

以上、子どもが非行と見なされる行為をなしたときの、家庭内の大人である親の教育力がどのような変遷を辿っているかについて検討してきた。その結果は、以下のようにまとめることができる。

被調査者が若者であった頃、非行と見なされる行為に対する親の反応は、そうした行為をやめるように強要する直接的な行動として現れていたようである。しかし、現在は、自分の子どもが非行と見なされる行動をしているという他人からの情報を得ても、事実を確認しない、また、子どもの行動に気がついてはいるが、見て見ぬ振りをしてしまうという。子どもへの興味は高く、子どもの行動を大変よく知ってはいるが、厳格な注意をなさない親の姿が見られた。

つまり、家庭における教育力が、過去のそれに比して、質量ともに低下してきていることが分かる。